

「追悼・鳥山敏子」

鳥山敏子と会ったのは、どこだったか、いつだったか、今はもう思い出せない。だが、その鳥山敏子がわたしの姉になった。魂の姉になった。実の姉にもよく似ているが、それだけではない。宮沢賢治とルドルフ・シュタイナーとの関わり方。子どもたちへの半端ではない迫り方。すべてにおいて、魂と身体を同時に感じさせるその言葉と行為。

鳥山敏子は身体に食い込むゆえに、魂に食い込む。そのような捨て身の食らい付き方を鳥山敏子は曝け出し、示した。15年前と少し前、1998年11月の末、鳥山はわたしに「歌わないの?」と投げかけた。その言葉はわたしの身体を貫き、魂に届いた。弾丸のような、火山弾のような熱い返答を返し、その夜からわたしは「神道ソングライター」になった。

鳥山敏子はわたしを変えた。というよりも、わたしをわたしにした。自己実現などというきれいな事ではない。わたしにわたしを捨てさせることによってわたし自身に成らせたのだ。元共産党員の鳥山は工作の名人である。オルグの達人である。アジテートする破壊者だ。人をそそのかし、その気にさせ、自分を捨てさせ、自分にさせる。自分に成り切るためには、確かに、乗り越えなければならない深淵がある。その深淵の魂の深度を鳥山はよく知っていた。その魂の乗り越え方を、鳥山は身をもって指し示した。

その鳥山敏子の身体と魂とその行為は不滅である。鳥山の言葉は生者のみならず、死者をも貫く。現界と霊界を串刺しにして逝った姉・鳥山敏子を心から称え、追悼する。

鎌田 東二 (京都大学こころの未来研究センター教授・東京自由大学理事長)



2013年度ゼミナール報告

特別企画 「大重潤一郎監督作品連続上映会」

大重潤一郎×四宮鉄男×堀田泰寛〜映像のコンビネーション

高橋 あい (担当・運営委員)

昨年度に続き、当NPO副理事長でもある映画監督・大重潤一郎作品の上映会を隔月・計六回おこなった。今年度は、大重監督の一作品と、四宮鉄男監督が堀田泰寛カメラマンが携わった一作品を組み合わせ、毎回二本の映画を上映した。四宮・堀田両氏は、大重監督が岩波映画で助監督を勤めていた時代からの同胞である。



(左より 四宮鉄男監督・大重潤一郎監督・堀田泰寛カメラマン)

静かに、呼吸をするように生命を見つめる詩的な大重作品と、ある出来事や人にフォーカスをしたドキュメンタリー映画を同時に上映したとき、その二本は拮抗できるか、企画者としては挑戦であった。二本立てがどのように響いたかは、鑑賞者それぞれに委ねたい。私個人としては、大重監督と縁のある方々の作品には、同じ時代の精神性が響き合い、こんな贅沢な企画は東京自由大学ならではであったと思う。

最後に、今回の上映企画にご協力頂いた四宮鉄男監督、堀田泰寛カメラマン、グループ現代・小泉修吉様、森田恵子監督、野沢和之監督、五十嵐匠監督に心より御礼申し上げます。来年度も引き続き「大重潤一郎監督作品連続上映会」を続けます。また、大重潤一郎監督が自分の映画人生について語った「友よ! 大重潤一郎 魂の旅」(四宮鉄男構成・森田恵子撮影)のお披露目上映会を4月12日東京自由大学にて行います。来年度も是非お越し下さい。

ウェブマガジン「the Earth of Free Green(EFG)」

今年度より東京自由大学のウェブマガジンを始めました。2016年春、東京自由大学のスピリットを、鎌田東二先生を始めとする現行のメンバーから、若い世代(通称・ユース)が継続していくことを模索しています。東京自由大学がどのような時代背景のなか誕生したか、また、どういう人が関わってきたかを顧みる場として、また、新しい世代がいま何を考えて生きているかを発信しあう場になることを目指しています。2016年まで、隔月で続ける予定です。是非、ご高覧下さいませ。
<http://freegreen.jimdo.com/>

自主ゼミ 荘子読書会

海野 和二郎 (NPO法人東京自由大学学長)

孔子の「仁」の道徳、老子の「道(タオ)」に始まる「三から万物」の宇宙哲学に比して、無為自然のスケールの大きさに勝る荘子流宇宙、天下の寄書「荘子」を隅から隅まで熟知している木村真呂さんが解説する。来たりて人生を連観すべし。

自主ゼミ 民俗舞踊の身体研究会

鳥飼 美和子 (担当・運営委員長)

民俗舞踊は自然と共に生きてきた日本人が、暮らしと祭り、神々への感謝、身体と精神の融合、エネルギーの更新として編み出した身体の叡智である。その価値をいち早く身体と感性でキャッチし、実践と研究、現地との交流を重ねてきた須藤武子氏。今年は須藤先生の研究所でお話を伺い、息づかい、肩づかい、そして心遣いを学んでいった。

自主ゼミ 大乘経典『華厳経』読誦

磯脇 信海 (一般)

マインドではなくセルフを生きる僧侶、野村先生のもと「一つの微塵の中に、微塵の数ほどの多くの国土があり、その一つ一つの国土に思議し難きほどの多くの仏があり、一人一人の仏が衆会の中に処すのを、我は見ん。恒に菩提行を演べながら。」と説く華厳経を読誦します。ここには大乘仏教の素晴らしい仏の世界がキラキラと輝いています。発心した人も、していない人も是非この講義を受けてみてください。



講師：野村 懷忍氏 (高野山東京別院執事)

自主ゼミ 「ブッダのサイコセラピー：心理療法と“空”の出会い」を読む〜瞑想とセラピー編〜

立花 慶治 (一般)

とても独りでは歯が立たない本だ。心理学者であるファシリテーターに導かれ、少しずつ理解が進む。具体的な症例に誘発され、和やかな雰囲気の中で真剣な議論が交わされる。

昨年末、精神科医である著者の体験談を聞く機会があった。テキスト講読と照らし合わせてこう考えた。無我とは自我を弱めることではない。しなやかに安定した自我を養うことで初めて無私の生き方につながるのだ。

ファシリテーター：立花 蓉子氏 (心理学者)



調査研究事業 コロキウム「第8回再生可能エネルギー世界展示会」参加

井上 喜行 (担当・運営委員)

日時：2013年7月24日(水)〜26日(金)
会場：東京ビッグサイト西ホール
展示内容：①Genesis計画(超電導直流送電システム)による太陽エネルギーの全世界での利用方法。
②溶融塩液を利用した蓄熱発電装置。
③集熱による太陽熱発電システム。
海野和二郎学長と大木健一郎氏の合作による展示に多くの参観者から好意的なご意見をいただいた。



自主ゼミ シュタイナー・ゼミ

鳥飼 美和子 (担当・運営委員長)

2000年から続いてきた西川隆範氏を講師に迎えての「シュタイナーゼミ」。シュタイナーの著書を読み継いできた。西川先生の温かいお人柄もあって、参加者それぞれが自分の思いを語り自由な雰囲気でのゼミだった。それが西川先生の体調でお休みとなったのは、昨年度の9月からだった。2013年度は5月から再開しよう、と西川先生からのお便りに一同、楽しみにしていた。しかし、体調悪化でなかなか再開することが出来ず、7月には先生のお宅の近くまで行ってゼミをしようと言う話もあった。しかし、それも叶わず、7月17日に西川隆範先生は霊界に旅立たれた。その前日にメールを頂いており、最期まで西川先生は平常心で、私たちを導いて下さった。東京自由大学では、9月29日に「西川隆範先生を偲ぶ会」を行った。西川先生と東京自由大学に縁ある方が集い、先生への感謝の言葉を述べた。奥様にもご列席いただいた。シュタイナーゼミは開講したが、西川先生は私たちのなかで生き続けておられると感じている。深謝合掌。

NPO法人東京自由大学理事会・運営委員会は、地球システム・倫理学会の『巨大コンクリート防潮堤建設の見直しを求める緊急声明』を支持します。

鎌田東二理事長が会員・常務理事の「地球システム・倫理学会」は、昨年7月30日に「巨大コンクリート防潮堤建設の見直しを求める緊急声明」を発表した。この声明の骨子は、3・11後、被災地海岸線に計画され、一部着工されている最大高さ16メートル、最大底辺80メートルの防潮堤の築造に反対し、地域住民主体の親水的な暮らしの知恵を活かす防災の再構築を国・県および関係者に求める、というものである。これを受けて、東京自由大学運営委員会は8月11日にこの声明を支持することを表明した。

被災地住民や多くの見直しを求める声によって、2013年12月4日に自民党の環境部会でのコンクリート防潮堤への問題点指摘に対し、建設を推し進める村井宮城県知事から「柔軟に対応」との言葉を得たとのニュースもあるが、まだまだ楽観できない。

東京自由大学では、2014年度も「震災解説事典」を継続し、さらに震災の問題への探究を深めてゆく。また2014年度夏合宿では東北被災地を再び訪れる予定である。訪問地の大槌町は巨大防潮堤見直し運動の発祥地であると言われている。これからもこの問題の行方を見続け、地域住民主体の環境と共生する防潮・防災構想を求めていきたい。——— 地球システム・倫理学会HP <http://www.jasgse.com/>

●<http://jiyudaigaku.la.coocan.jp> ●E-mail: jiyudaigaku@nifty.com

Newsletter Vol.22 2014年(平成26年)3月20日発行

編集・発行 NPO法人東京自由大学 / 事務局 〒101-0035 千代田区神田紺屋町5 T.Mビル2F TEL&FAX: 03-3253-9870

デザイン (有)アンビエンス / 印刷 (株)ベクトル

NPO法人 東京自由大学 Newsletter 2014.3.20 Vol.22

三省祭り2013

2013年10月27日(日)

鳥飼 美和子 (担当・運営委員長)

「農の恵み・土という幸福〜山尾三省のジジテリアン大祭〜」

トークセッション/パネリスト：鶴田静氏 (エッセイスト・業食思想研究家)、大友映男氏 (やさい村、太極拳指導者)、高橋秀夫氏 (八百屋ろ、詩人) コメントーター：長屋のり子氏 (詩人) 司会：鎌田東二理事長

山尾三省氏は、屋久島で土を耕し、その恵みを食し、いのちをはぐみ、アニミズムを未来への希望として詠い、語り、綴った。こころとからだの糧となるほんとうの食物を育む大地の豊かさ、それに素手で関わる農という仕事、それ全体を三省氏は「土という幸福」と呼んだ。今年は、「農」やそれが生み出す「やさい」に関わる仕事をしておられるパネリストにお集まり願っていた。三省氏が既成の社会の枠を脱してオルタナティブな生き方、新たなコミュニティを模索したヒッピームーブメントの時代からの友人である大友映男さん、鶴田静さん、高橋秀夫さんに囲まれて、三省さんの写真の笑顔はいっそう嬉しそうである。

その時代を彷彿とする数々のエピソード、それは若者が未来や人間に希望を抱いて

チャレンジしていた時代であり、今聞くと、その冒険性と創造性に驚かされる。また、コメントーターの詩人・長屋のり子さんの、妹でなければ知りえない数々のエピソードは三省さんの少年時代を想像してほえましい。まさに今年の三省祭りは、三省さんを偲びつつ、生き生きした時代に魂を旅させた時間であった。「山路来て 何やらゆかし すみれかな」



左より高橋秀夫氏、鶴田静氏、大友映男氏

「火を焚きなさいアートフェスティバル」

毎年恒例の三省祭りに合わせて、今年はアートフェスティバルを企画した。山尾三省と宮澤賢治の願いと祈りを受けて、「火を焚きなさいアートフェスティバル」と名付けた。東京自由大学に関わる人たちが、魂の灯である表現を持ち寄り、集い、ひととき大きな炎として、いのちの光と熱を発信しようという試みだ。3日間の催しや出演者は以下の通り。

25日(第一夜) ドキュメンタリー映画・大重潤一郎監督作品

『能勢〜能勢ナイク反対住民連絡会議』

アートフェスティバル開会宣言:鎌田東二理事長×海野和二郎学長のトーク

海野和二郎学長米寿の祝い+会員パフォーマンス

(マンドリン)菜花英子・(歌)ラウラさくら、井上きゆき、高山卓夫、他の皆さん

会員のみなさんとの歌声アットホームな雰囲気、東京自由大学が歌声喫茶となった。

26日(第二夜) 朗読『アングリマール』作・朗読：田口ランディ (音楽：鎌田東二)

田口ランディさんによる「アングリマール」の朗読は、どんどん変容しているとのこと。その夜は、鎌田理事長の笛や石の音とともに語られ、アングリマールとブッダとの出会いに会場は静まりかえり、魂の変容のときを体感した。

特別企画

「震災解説事典 〜3・11の過去と未来を読み解く〜」後期の講座を終えて

辻 信行 (担当・運営委員)

○はじめに

前期に引き続き3人の講師をお迎えし、震災後の生き方を模索した。ここに第四章〜第六章の講座の様子を報告する。

第四章：10/26(土)

「原発といのち」講師：田口ランディ氏(作家)

1999年に発生した東海村JOC臨界事故。田口ランディさんはこれをきっかけに、原発の問題と深く関わり合うようになる。原発推進派を含め、さまざまな立場の専門家と対話し、自らが納得するまで追求して著書を出されたのだ。講演ではご自身の原発問題に対する認識や姿勢、さらには他者理解の方法にまで話が及んだ。



田口ランディ氏

第五章：12/1(日)

「震災後の生のかたち」講師：平野啓一郎氏(小説家)

たった一つの「個人」は存在しない。いくつもの「分人」があるのみ。平野啓一郎さんの分人

主義は、震災後の社会で被災者と、あるいは死者と向き合うとき、大きな安心感をもたらしてくれる。対談では南方熊楠や宮沢賢治を分人主義の先達とし、盛り上がった。

第六章：12/21(土)

「震災と宗教」講師：鎌田東二氏(宗教学者・京都大学教授)

宗教は、被災者に救いをもたらすのか? 鎌田東二さんは、「もたらしめ」と強く答えた。「宗教は救済の力を持っていると同時に、とても危険で、デリケートです。だからこそ宗教は言葉を超えて、『もう一つの世界』を創り出すのです」。新しい時代の宗教のあり方を考えさせる時間となった。

○おわりに

今年度の「震災解説事典」にご来場頂いた皆さまに、心より御礼申し上げます。この講座は、来年度も引き続き開催する予定です。皆さまのお越しを、スタッフ一同お待ちしております。



平野啓一郎氏



鎌田東二氏

現代霊性学講座第3弾

「山伏と修験道〜森のいのちの声を聴くワザ」

2013年度下期は、第3回と第4回。明治5年(1882)に廃止とされた修験道。神仏分離令を発布した明治政府は、文明開化と殖産興業と富国強兵に向かったが、その道は正しかったのか。神仏分離の対極にある生命力に充ちた神仏習合の極み、修験道の奥深い世界——自然の中で神仏に祈りを捧げ、全力でからだを使い、ところを練り上げていく修験の道とワザを探索し、森のいのちの声に耳を傾ける企画。

第3回「修験道の基本」——9月28日(土)は、宮家準さん(慶應義塾大学名誉教授・宗教学、修験道管長・法首・総本山五流瀧尊院住職)の講義。該博な知識と卓越した知見に根差した修験道全般にわたる基本的なお話をよどみなく展開された。ご本人は、児島修験の寺院、五流尊瀧院出身で、同寺の住職兼宗教法人「修験道」管長・法首をつとめられており、実体験にもとづいた貴重な内容となった。

第4回「次世代トーク 修験道の未来を語る」——10月14日(月・祝)は、修験を目指す若き二人によるトークライブ。関口亮樹さん(天台宗・中應山蓮台院慶福寺住職・全日本仏教青年会

2013年9月28日(土)/10月14日(月・祝)

宮山 多可志 (担当・運営委員)



宮家 準氏



関口 亮樹氏



坂本 大三郎氏

副理事長)と坂本大三郎さん(イラストレーター・山伏・明治大学基層文化研究所客員研究員)、それぞれの貴重な体験からご自身の宗教観まで、山中の修行と神秘の世界について生きた言葉で語り合っていた。

人類の知の遺産（第Ⅷ期）～人類の夢見と思考のマンドラ世界を旅する～

酒井 孝 (担当・運営委員)

4/14 (土)「佐藤春夫～熊野新宮生まれの田園と都会の憂鬱～」

井村 君江 (うつのみや妖精ミュージアム名誉館長)

「病める薔薇」(あるいは「田園の憂鬱」) 習作時代をめぐって、「憂鬱」は気分ではなく、人生観いわばボードレールの倦怠(アンニュイ)であり、私小説や心理風景ではなく「意識の流れ」小説を先取りした作品とのこと。



11/16 (土)「カミュ ～『異邦人』と『よそのもの』～」

野崎 歓 (東京大学教授・仏文学者)

カミュ『異邦人』の新しい読み方を、野崎先生は流麗で音楽的な語りによって解説された。主人公ムルソーの苦悩は、現代人にも通じる普遍性を帯びており、心に強く響いた。



5/11 (土)「マルセル・モース ～『贈与論』の地平～」

大澤 真幸 (社会学者・元京都大学人間・環境学研究院教授)

モースの「贈与論」は謎を贈与する、と題して現代日本を代表する社会学者が、不思議な贈与交換、互酬性の二律背反、自分自身の贈与、闘争としての贈与、双子のパラドクスなどを鋭い切り口で解説した。



1/11 (土)「中村元 ～敬愛するわが恩師～」

植木 雅俊 (仏教研究家)

4万枚の原稿の行方不明という逆縁が受賞に転じたエピソードなど、大学者に身近で接した元物理学者、自称「仏理学者」の、一冊の評伝を読んでいるかのような、恩師への敬愛に満ちた話に時計が止まった2時間だった。



6/22 (土)「ソシュール ～秘密の言葉たち～」

中村 昇 (中央大学教授・哲学者)

言葉とは何か? その本質的な問いに、前半はソシュールの言語学から、後半は土方巽の暗黒舞踏からユニークな考察がなされた。難解な言語学を落語家のように軽妙に語り、終始爆笑が巻き起こった。



2/8 (土)「安部公房 ～越境する世界文学～」

鎌田 東二 (京都大学こころの未来研究センター教授)

詩と哲学と小説が一体になった、SF小説とも幻想小説はまた観念小説とも見えるその実験的小説世界は常に深く「人間とは何か。人間が生きている社会のシステムとは何か」を問いかけている。ノーベル文学賞受賞寸前だった大作家に鎌田節が炸裂した。



10/19 (土)「レヴィナス～生の跳躍とカバラの言語神秘主義～」

永井 晋 (東洋大学教授・哲学者)

難解な哲学の話をその独特の説得力とホワイトボードを駆使して説明くださった。「意味」はその語以外のところではなく、辞書的な意味をつきつめると無限に意味にはたどり着けない。……うーん。



アートシーン21 (Part XI) ～クリエイティブな世界を切り開く表現者たち～

岡野 恵美子 (担当・副運営委員長)

第1回 6/15 「熊野と俳句と私」 堀本 裕樹氏 (俳人)

中上健次を尊敬し、健次の直筆色紙「紀州、輝きの間の国家よ」(貴賤混交の世界)を大切にする堀本氏。俳人協会新人賞を受賞した句集『熊野曼荼羅』は土地と言葉が密接に繋がる文学の深さを再興し、蘇りの息吹を吹き込んだ。熊野は場所の記憶が積層し、熊野を思うと血が滾ると言われる。十句抄の自句自解を通し、十七音の無限の世界を参加者に伝え、カナカナの声のCDと共に日暮しの俳句の朗読を聴く喜び、映像・熊野観心十界図曼荼羅の絵解き等、眼耳心を満たす工夫の数々を凝らしてくださった。季語クイズの答え合わせを通し、未知の季語に驚き、俳句の面白さにも興じた。



第2回 7/20 「歌のちから PartV」 あがた森魚氏 (歌手、シンガーソングライター、俳優)

あがた森魚さんのライブは今年で5回目となる。歌と語りの境界や壁がなく繋がっているあがたさんのライブは、山や森だけではなく私たちが暮らす都会も僕らの大自然と抱きとめ、あらゆるもの一會場の空調の雑音ともセッションする。あなたに会えてうれしかったよ、今一番悲しんでいる人の前で歌いたい、こころ許せる人とたわいない話を語らっているのが最高の贅沢、俺のブルースはまず俺に言っている、それをあなたに伝えたい、とギターを爪弾きながら語る言葉の数々。最後は名曲「佐藤敬子先生はザンコクな人ですけど」を熱唱、歌のちからの凄さに感動の渦が湧き上がった。



第3回 10/12 「水と共生するヴェネツィアー水害との戦いと華麗な都市文化」

陣内 秀信氏

(建築史家・イタリア建築・都市史・法政大学デザイン工学部教授)

ヴェネツィアは水上都市、迷宮都市、祝祭都市、演劇都市、ヒューマンスケール都市、五感の都市であり、幾度も危機を乗り越えてきたサステイナブル都市である。中世の原理をベースにしている中世的・オリエンタ的空間の基層の上に出現した、スペクタクル・エンタテインメント空間の魅力溢れるルネッサンス的文化都市でもある。古い都市を千年以上

メンテナンスしながら価値をキープしつつ、輝きをアップする努力を継続してきた。ラゲーナ全体の自然環境保護、水を生かす尽力を地域専門家と市民が共有し、美を宿す個性的なヴェネツィアは未来への示唆に富み、一周遅れのトップランナーと言えるのではないかと。



主催ゼミ 「モンゴル文化とシャーマニズム」

講師：アルタンジョラー

(文化人類学・モンゴルシャーマニズム研究・京都大学こころの未来研究センターワザ学共同研究員)

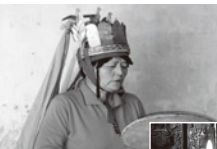
この講座では、モンゴル人の伝統的な信仰体系とされるモンゴル・シャーマニズム、とりわけホルチン地方のシャーマン=ブオの実態・実践を中心に紹介した。

第1回：2013年12月20日 多元的な医療体系や多様な宗教形態が並存するなかで、ブオがどのような生命観をもち、どのように生き延びているかを、映像資料(写真や動画)を用いて伝えた。

第2回：2014年1月17日 ブオの修行過程や儀礼様相を具体的に述

べると同時に、シャーマニズムにおける神話的世界観と儀礼実践との関係性、そして「危機」とその意味をめぐって語った。

第3回：2014年2月7日 モンゴル・シャーマニズムを支える自然環境と文化・社会的基盤に焦点をあてながら、現代社会における伝統的な生活や信仰のありかたを、映画資料を通して観ていただいた。寒いなか足を運んでくださった皆様、陰ながら応援してくださった皆様に心より感謝申しあげたい。



女性ブオ



ブオの灯明

21世紀世界地図 (第Ⅻ期) 総括 ～「ちょっと待てよ」～

山口 卓宏 (担当・運営委員)

ここ2～3年で、世の中の風景が一変したような気がします。電車の中、車を運転しながら、歩きながら、自転車に乗りながらのスマホ。まるでヤドカリ人間の世界だ。いつも自分の個室を背負っているように見える。「自分の家の中で、何をしようか勝手にしよう」と、にらまれているような錯覚に陥る。先日、そんなヤドカリ人間に足を引っ掛けられ、家内が骨折した。「ちょっと待てよ。みんな足元を少し見つめ直そうよ」。4人の先生と足元を見つめ直す貴重な機会でした。

4/20 (土) 「東アジア情勢と儒教思想」

中島 隆博先生 (東京大学東洋文化研究所准教授)

中国では今、儒教が復活してきている。人民大学に孔子像が立てられていることが、それを象徴している。中国の知識人は、「共産主義」だけでは、国が保てないことに気がきはじめている。なぜなら、神的なものに通じる通路や、神的な感覚がない共同体はかなり危険であることを実感しているからだ。おそらく、世界中の人々がこれと似た感覚に気付いてきている。人間は、「自分が存在している意味」を感じたい。みんな「意味の空虚」に耐えて生きている。独善的な〇〇教ではない「宗教的公共空間」を、人々は必要としている。



4/27 (土) 「イマドキの思春期と臨床心理学の現在」

岩宮 恵子先生 (島根大学教育学部教授)

「人間関係の規制緩和」の結果、「好きな人とだけつき合えばよい」・「同じクラスだけだ……名前知らない」などの現象が生じている。「イツメン」(いつも一緒にいるメンバー) 以外の人に対しては、露骨な拒絶反応しても、全く問題にならない人間関係の空間が広がっている。そしてネット文化が、その世界の拡大に、さらに拍車をかけている。だが「イツメン」もけっして親友ではない。本当の親友はネットの中にいる。だからクラスでは「イツメン」から外れないよう適当に人間関係を演じる。しかし、ネットの人間関係も所詮は二次元的な繋がりではない。結局、リアリティをどこにも感じられない、離人症的な若者が増えているという現象が生まれることになる。



11/9 (土) 「インドを学ぶ公共哲学～インド植民プロジェクトなどの社会公共活動を通して～」

矢崎 勝彦先生 (株式会社フェリスモ会長、公共哲学共働研究所理事長)

「宮澤賢治に足りないものは?」という参加者からの質問に、矢崎先生は「雨にも負けず」における「行って」であるというお返事をなさいました。「東に病氣の子供あれば行って看病してやり、西に疲れた母あれば行ってその稲の束を負い……」宮沢賢治は、東西南北、困っている人のもとに「行って」助けたかった、共に動きたかった、しかし、行けなかった。ゆえに、「そういう人に私はなりたい」と願っていた。矢崎先生は「行って=実践」の重要性を何度も強調されました。



12/14 (土) 「ひので科学プロジェクト・太陽の異常? プラズマ現象」

常田 佐久先生 (JAXA宇宙科学研究所所長)

①英国気象庁発表(2013年1月8日):「2020年頃まで顕著な温度上昇は予想できず、地球温暖化は停滞している」
②米学術研究会議報告書(2013年1月8日): NASAによる概説「最近の太陽活動の停滞を認識」「マウンダー極小期に入る可能性を指摘し、学際研究の強化を提案」
常田先生のお話は、①②の二つの報告からはじまりました。そして「太陽がこれまでにない四重極構造に遷移しつつあることを発表」→「この現象はマウンダー極小期(1650～1700年: 小氷河期) への移行期と共通性がある」→「もしマウンダー極小期なら、2020年頃開始となる」と先生の最新の研究成果をお聞かせいただきました。



コンテキストデザインワークショップ2013「テーマはライフスタイル」

上林 壮一郎 (デザイナー・運営委員・担当講師)

今年度はライフスタイルをテーマに2回行った。1回目は参加者各自の生い立ちを振り返ってもらい、その中から出てきた生き方や価値観をベースに架空のカフェを作ってもらおうというワークショップであった。方法としては、実際のカフェを作る代わりに、カフェの看板にカフェの名前やキャッチコピーやメニューなどを(値段も含め)書いてもらうことや、それを店長さながらにエプロンをつけて路上で記念写真を写したり、最後はみんなに発表することでアフターメーションにもなるというもので、参加者の中にはその後実際にそのようなカフェを始めた人もいた。



2回目は新企画である。これまでのワークショップという形式ではなく、フェスタ。場所もふんだんに杉材を使った建築家落合俊也氏の素敵な空間である先端住宅「月舞台」。ト

ークセッションや音楽ワークショップ、飛び入りの歌や美味しいワイン、美味しい料理などで、雰囲気も温かく大変な盛り上がりであった。テーマは「超領域」。これまでのようなスタイルの仕事の領域を超えて、新しい時代の意志を感じさせるような仕事。スモールライブつまり等身大の生き方、小さくダイレクトな反応が伝わる三輪自転車という販売スタイルで銀座で椎茸の菌床を売る虹山さんや、建築の仕事の一方でワイナリーを目指して農業を行う若井さん、企業の中での独自の環境の取り組みをする柳沼さんなど魅力的な人が集まり、自分や自然に正直な価値に基づく生き方＝ライフスタイルを確認した。



ボディワーク・身体の探求「水を体感する・滝行」

鳥飼 美和子 (担当・運営委員長)

毎年恒例の東京自由大学のボディワーク・滝行は、自然の滝で、水のエネルギーと日本独特の修行文化である滝行を体験する企画でリピーターも多い。2013年度は7

月14日に行った。毎年、鎌田東二氏、佐々木雅之氏、海野直宏氏の先達によって安全に行われている。

主催ゼミ 大澤ゼミ「動物の社会/人間の社会」

宮山 多可志 (担当・運営委員)

「人間とは何か」ということを、社会学、動物学、脳科学、等々の広い見地から考える。社会を形成するのは人間だけではない。昆虫をはじめ、多くの動物たちがそれぞれの種に固有の社会性をもっている。では、人間的な意味での社会性とは何か。そして、それはいかにして可能になっているのか。

第1回は、10月18日(金)に開催された。テーマは「社会生物学」。進化論や社会生物学の現代的な成果を考慮しながら、まず、人間的な意味での社会性の輪郭を捉える。

第2回は、11月29日(金)に開催。テーマは「霊長類学」。チンパンジーやサルの研究をベースに、人間に極めて近い種とされる霊長類たちの社会性やコミュニケーションのあり方、記号操作の能力を考え、それと人間の言語能力との違いを考える。

第3回は、1月31日(金)に開催。テーマは「脳科学」。アントニオ・ダマシオなどの業績を参照しながら、現代の脳科学が発見した「ミラー・ニューロン」の画期的な意義を考える。「私」という意識(自己)の根本的な成立の局面に他者が介在していることを、脳科学・生物学的なレベルで明確にしたのがミラー・ニューロンの発見だった。

以上3回の講座を通じ、人間に固有の社会性の特徴と成り立ちから、人間存在を考えなおす、貴重なゼミとなった。



講師：大澤 真幸氏

(社会学者・元京都大学 人間・環境学研究院教授)